

自分の生れて世に出た時のことを覚えていて、と書いたものに出遭ったことがある。それは多分嘘だと思うが、さて、子供の頃の記憶はいつに始まるだろうか。私の場合も、切れ切れではあるが、一、三才のときからあるような気がする。もつとも、これは多少怪しいので、母親などから聞いていた話が、いくつかしら、自分で見聞きしたように思っていることも混じっているかも知れない。そのつもりで読御承知いただければ結構である。

私の生れた大分県宇佐から父の転勤で移り住んだのは新潟県高田市である。日本でスキー発生の地といわれ、まことに雪深いところであった。丈余の雪は二階まで届く。下は隣りとの通行のための通路となつている。二階の床が張り出して通路の屋根となつていた。

そして朝、雪に反射して目にキラキラと輝やく雪の道を早く起きた大人たちが、雪を踏み固めて子供が登校できるように道を作るのである。その道には、二階の窓を開けて出たように思う。

そして、春、固い雪を大きな鋸で切つて氷室に運び、夏に氷のように使う、と覚えているが、本当に自分で見たものだろうか。

高田から群馬県の桐生に移つたが、どうもこれは記憶していない。隣りが陸軍の連隊長の家だつたと母親から聞いたような気がする程度である。

ここは短い期間の住いであつたが、次に住んだ愛媛県は大洲の町、ここはもう大洲小学校の附属幼稚園に通つていたから、かなりいろいろなことを鮮明に覚えている。

後年、主計官の時に何かの視察で久しぶりに現地を訪れた際、何もかも昔のままの姿が残っているので懐かしかった。ただ、「鍛冶屋」がなくなつて、後が「かしや」になつていったりの変化はあつた。

大洲から故郷横浜に引越したわけであるが、長浜から船に乗って今治に入り、それから瀬戸内海を東に、神戸に入った。神戸から、どこをどうと通つたかは覚えていないが、奈良に泊つて春日神社にお参りし、鹿と一緒に写真をとつたことは覚えている。その時何故かつき出した手の指を五本とも抜げていたことを妙に覚えている。

東海道の三等の列車にゴロゴロしながら寝ていて、夜中に何べんも落ちて、両親にしかられたことを思い出す。長い汽車の旅であつたと思う。

大洲での思い出は少なくない。

中学の英語の教師をしていた父に毎日母が弁当を届けさせる。それを中学の悪童どもに見つかつてからかわれる。嫌だつた。父は毎日のように放課後テニスをしていた。それを見るのは楽しみであつた。当時はまだ電灯がなかったか、不充分だつたが、私はよくランプのホヤ磨みがきをさせられたが、新聞紙で磨くうちにいくつも壊して叱られた。裏は石槌山脈が迫つていて、時に切り出した石が家の前に並べられていた。ある日、その石に登つて、鋭い先で手の指が血だらけになり、アルコールで洗つて貰つたが、とても痛かつた。

近所に立っていたガス灯に石を投げたら命中したガラスもろとも壊した了つたこともある。隣りの家の中学生が英語を習いに来ていた。いつも、その肩につかまったりする。そのお兄ちゃんには、自分の家の庭に柿の木が一本ある、そこえ銅の皿みたいなものを吊して当時珍しい空気銃で打つて楽しんでいた。私にも打たしてやるから、もう肩に登らないでくれという。

近所に鍛冶屋があつて、毎日馬の蹄鉄を打って、取りつけている。その火花が綺麗でいつまでもうずくまつて、馬はカネを釘を打ちつけられても痛くないのかといつまでも眺めていた、と思つた。

幼稚園に通うのが大嫌いで、母が困つて女の先生に毎日迎えに来て貰つた。その先生は毎朝私の手を引いて同僚の男の先生の家に寄る。

そこで、家の中に入つて暫らく出て来ない。私は川のほとりの葦の芽をつみながら先生の出てくるのを待っている、小さい手に一杯、溢れる程になる頃、二人が現れる。幼稚園には遊動円木とブランコ、平均台があつたくらい。

夏の宵、肱川にホタルが光っている。團羽をもつて追い、運の悪いホタルを何匹か虫籠に入れる、青い沙をすかして、呼吸をするかのように断続的にピカー、ピカーと光る。しかし、その光る身体は何故冷いのだろう。

駅馬車が街中を走る。二頭立て御者台の両側にはランタンがぶら下がっている、夕暮れのもやの中をランタンの黄色の灯を曳くようにふりながら馬車は行く。

すべて、なかつたような気さえする昔の街の絵である。

家は珍らしい町営住宅であつた。家は崖の上、崖の下には広い原っぱがあつただけ、あんなに広いと思つていた原っぱは本当に狭いものであつた。子供の頃見たものは、身丈に合わせ覚えていたものだと思つた。

家に畑が続いていた、キユリが沢山竹の筍にからんでなつていた。なすも黒々と光つていた。

横浜に移つてからのことはいずれ又、書くこともあろう。